

差別を生み出すもの②

「福島県民お断り」(第36回全国中学生人権作文コンテスト 法務省人権擁護局長賞 作品)

「福島県民お断り」それは、福島県民の私に大きなショックを与えるものでした。小学三年生まで、私は福島県南相馬市で生まれ育ちました。南相馬といえは野馬追が有名で、昔からの歴史を大切にしている町です。私は、そんな南相馬の町や人が大好きでした。しかし五年前、東日本大震災の影響で原子力発電所が爆発し、全てが変わりました。放射能の影響から、相馬市は一夜にして人の住めない町になってしまいました。

この事故の影響で、私は家族と一緒に、親戚がいる栃木県に避難することになりました。ところが、その途中に寄った店で、とても衝撃的なものを見てしまいました。それは、駐車場に停めてあった車に、「福島県民お断り」と書かれたステッカーを貼った車があったのです。私はそれを見て、これからの事が不安だったこともあり、「え？」とただただパニックになり、意味を理解したとき、悲しい気持ちになりました。

震災から五年が経過した現在でも、福島県に対する偏見はまだまだ消えていません。それは、祖母の知人が熊本地震の際に、支援物資を届けに行ったことでした。

決して近いとはいええない熊本に、福島から行ったのにも関わらず、「福島は物資はいらぬ」と現地の方々に拒否されたそうです。現地の方々も、放射能の被害を恐れての発言だったのでしょうか。しかし、被災した方々のために、直接届けに来てくれた人に向かってどうしてそのような心ない言葉が言えるのだろうかとうむなしさがこみ上げてきました。

結局、その場所では物資を受け取ってもらえず、別の場所で受け取ってもらったそうです。この話を聞き、福島県の風評被害は今なお続いているのだと恐ろしい気持ちになりました。同じ日本人なのに、どうして福島県から来ただけで、このようなひどい言葉をかけられなければならないのでしょうか。私が育った町や人が否定されるならば、私の今までの人生までも否定されている気がしました。

震災後、私は自分の気持ちを人に話すことが苦手になってしまいました。「福島県民だ」という周りの人達の視線がとても気になったからです。しかし、そんな私の心を、新たな出会いが変えてくれました。

小学五年生の時、私は宮城県の女川町に引っ越

してきました。見知らぬ土地での生活はとても不安で、これからどんなことが待っているのか心配でたまりませんでした。また「福島県民だ」と悪者扱いでもされるのかと思っていました。

自己紹介を終えて指定された席に着くと、周りは男の子達でした。するとその中の一人が、私に「福島から来たんでしょ？」と聞いてきました。私はその質問にひどく動揺し、この後何か言われるのだろうかと思いました。しかし、聞こえてきたのは私の想像するものではなく「大変だったね」という気づかいの言葉でした。他の子達も「友達にならない?」「一緒に遊ぼう」などと、とても優しく接してくれました。

女川町もまた、震災で大変な被害を受けました。友人の中にも、津波で家や家族を亡くした人がたくさんいました。それでも、明るく毎日を過ごしている友人を見て、女川の人たちの力強さを感じました。同時に、苦しい思いをしているのは自分だとばかり主張して、ふさぎ込んでいたのが「なんだ、この人達の方が辛かったんじゃないか」と思い、自分が情けなくなりました。女川町の人達は本当に強い人ばかりで、何度も助けられました。

私がかこまでの体験で感じたこと、それは「偏見」と「共感」です。「偏見」とは、自分の勝手なものをさして周りのものを判断することです。相手の気持ちを無視した、とても自分勝手な行動だと思います。皆さんは、人と関わる時、偏見をもって接することはないでしょうか。「あの人はテストの点数が悪いから頭が悪い」や「あの人は口数が少ない人だから暗い人だ」など、ちょっとした偏見で他人を見ることは誰にでもあることだと思います。しかし、その偏見が無意識のうちに人を傷つけるということを忘れてはならないと思います。

逆に「共感」とは、相手のことを思いやり、相手の立場に立って行動することです。私が女川に来てから、私の心に寄り添ってくれた友人たち。私の痛みを自分の痛みとして捉え共に乗り越えようとしてくれたことにとても感謝しています。だからこそ、自分もまた、傷ついている人がいたら共感し、手を差し伸べることのできる人間になりたいと思うようになりました。私は将来、自分を救ってくれた人達のように、苦しむ人の小さな助けになりたいです。

震災から7年がたった今現在でもなかなか風評被害や、偏見はなくなりません。わたしたちは、偏見と共感のどちらを選択するのでしょうか。偏った情報だけにまどわされず、正しい知識をもつことが大切なのです。

－ステレオタイプ－

わたしたちは、特定の集団や人に対して、単純化したイメージを持ちがちです。その内容は様々ですが、例えば、「都会の人は洗練されている」といった肯定的なものから、「都会の人は冷たい」といった否定的なものまであります。このような固定化されたイメージを**ステレオタイプ**といいます。ステレオタイプは誤りに気がついたり、多様な角度から事実を知ったりすることにより修正されていきます。しかしながら、修正されなかったステレオタイプは**偏見**へとつながることがあ

ります。

「偏見とは、ある集団に所属している人が、単にその集団に所属しているからとか、それゆえにまた、その集団の持っている嫌な特質をもっていると思われるとかいう理由だけで、その人に対して向けられる嫌悪の態度、ないしは敵意ある態度である」(G.W.オルポート「偏見の心理」より)とされています。そして、このような偏見が現代社会における差別を温存している1つの要因だと指摘されているのです。

－ステレオタイプが作用するもの－

つくりかえられる自分

わたしたちが他者に対して抱く期待が、現実のものになっていくという現象を**自己成就予言**といいます。例えば、「女性は数学が苦手である」というステレオタイプが、女性の数学に対する苦手意識をつくりあげ、数学の得点が低くなるという現象が指摘されています。さらに、遊びで血液型性格判断をしている人の性格が、その人の血液型のステレオタイプに近づいていくという現実もおこっています。

子どもたちに対してマイナスのステレオタイプを持って接することにより、その子がその通りになってしまう恐れがあるのです。

強められる思い込み

人の記憶は曖昧なため、思い出す際に、自分自身が意味づけした内容に近い形で強調される傾向があります。

例えば、ある子どもに対して「生活態度が良い」というイメージが一旦形成されると、そのイメージに合致する情報のみが印象に残り、良いイメージが一層強調されるようになります。もし、その子どもがイメージと合致しない行動をとったとしても、「この子には、こんな部分もあるのか」などと例外扱いし、イメージの悪化にはつながらないという傾向が指摘されています。



「ずっとこのままで」 大分市人権フォトコンテストの作品

るのではなく、いろんな視点から見て考えることが、相手への理解を深めることにつながります。

3. 想像力をはたらかせる

「一番伝えたいことは、一番言えないこと」という言葉があります。想像力をはたらかせ「もし自分だったら」と相手の立場になって考えることで、相手への接し方も見えてきます。そして、そのことがより良い人間関係づくりにつながっていくのです。

－ステレオタイプを少なくする－

ステレオタイプは、誰しものが少なからずもっています。それをなくそうとするのではなく、まず自分にもそのような傾向があると自覚することが必要です。

1. 批判的思考をすること

「昔からやっている…」「みんながやっている…」からといって同調していると、いわば思考停止状態になってしまいます。情報として知ったことを自分自身で本当のことなのか考え確かめていくことが大切です。

2. 多様性を認めること

自分に様々な面があるように、相手にも様々な面があるものです。一面だけを見て相手を判断す